

初期仏教に見る「ことば」の諸相 ①

これまで「聖なる言葉」とその翻訳に関する課題について概観した。本号からは、インドで興った仏教に焦点を当て、その伝道における「ことば」の諸相を概観したい。

初期仏教小史

仏教は、約2500年前にガウタマ・シッダールタという一人の求道者から始まった。彼の教えは人々に受け入れられ、次第に北インド一帯にひろまった。その後、インド世界を出てアジア全域に伝播し、長い時を経て仏教は世界宗教と呼ばれるに至った。「仏」とは、古代インドの典拠言語であるサンスクリット語のbuddha(覚者)の漢訳である。元来、buddhaは「目覚めた人」を指す呼称であり、ガウタマ・シッダールタのみを指す固有名詞ではなかった。彼はシャーキャ族出身であったので「シャーキャ・ムニ(釈迦族出身の聖人)」と呼ばれていた。シッダールタという名前には諸説があり、以下、釈迦と表記する。

釈迦の生涯にまつわる文献や資料は膨大である。しかし、それらは史実と伝説、創作が交錯しており、釈迦が歴史上実在していたということが学術的に確定したのはそれほど古いことではなかった。釈迦の生誕地に関して、633年に求法の旅路で北インドを訪れた中国の僧、玄奘は、「上部に馬の像のある無憂王(アショーカ王)建立の大石柱が釈迦生誕地にあった」と『大唐西域記』に記録している。(玄奘、水谷訳1999:291)

そのアショーカ王の石柱は、1895年、インドとの国境に近いネパールのルンビニーで発見され、英領インドの考古学調査官であったフェラー博士はその石柱に刻まれていた碑文を翻刻した。

「神の寵愛を受けたピヤダシ王(アショーカ王)は即位20年を記念し礼拝のために自ら此処を訪れシャーキャ族の聖者ブッダが誕生された此処に石柱を建立した。聖者が誕生されたこのルンミニ村の租税を八分の一に軽減する」(筆者訳)

この発見は仏教史において非常に重要であった。この発見以前には、釈迦は伝説上の人物であったとする説もあったが、この石柱碑文によってさまざまなことが実証されるに至った。アショーカ王は古代インドのマウリヤ朝の王で、在位は紀元前268～233年ごろであったと考えられている。彼は仏教に帰依した後、仏教聖地を巡礼し、数多くの詔勅碑文を残した。釈迦の誕生年代には諸説があるものの、紀元前5世紀半ばから4世紀前半の人物であると推定されている。王権による積極的な保護政策もあってアショーカ王治世の時代にはすでに釈迦の教えはインド全域及びスリランカにまで到達していたことがわかっている。

釈迦は29歳で出家し、35歳で悟りを得たのち、80歳で生涯を終えるまでの45年間、ひたすら伝道に身を賭した。自身の悟りを初めて説法した地、いわゆる初転法輪の地サルナートは、仏教四大聖地として現在もなお仏教徒の巡礼地となっている。釈迦の教えは次第にひろまり、ビクシュ(比丘)とよばれる出家者も増え、サンガ(教団)が成立する。

釈迦は基本的には出家至上主義を貫いたので、釈迦が説いた断片的な教えや戒めは、弟子たちによって教団内における戒律や実践項目として整理されていった。そのようなビクシュの共同体であるサンガを支援したのは、ウパーサカ(優婆塞)ある

いはウパーシカー(優婆夷)と呼ばれた男女の在家信徒たちであった。出家者は在家信徒に法を説き、在家信徒は布施により出家者を支援した。

釈迦が説法に用いた「ことば」は、当時の布教地であるガンジス河中流域のマガダ地方(現在のビハール州周辺)の言語、古代マガダ語であったと推測されている。ヴァルナによる身分制度に基づく社会的秩序を説くバラモン教の聖職者が、一般の人々には全く理解できないサンスクリット語で火の儀礼を行っていたのとは対照的に、釈迦は、プラークリット(自然言語)という、一般の人々が話していた民俗語を用いた。彼は日常の「ことば」で法を説き、人々を導いていった。徹底した平等主義と明快な論理で貫かれたその「ことば」は、当時の人々には、異次元の神聖なもの、威厳と権威に満ちたものというよりは、貴賤の隔てなく、心の憂いや現実的な苦しみや悲しみという人生の闇を照らす一筋の光明となったに違いない。釈迦とその弟子たちによる布教伝道の成果は目覚ましく、釈迦の教えは急速に北インド一帯にひろまっていった。バラモン教という、当時の社会における正統な宗教的枠組みのアンチテーゼとして広がりを見せた釈迦の「ことば」は、伝道の過程で他の諸言語への移し替えを迫られることになる。民俗語を用いたがゆえに、地域的な広がりとともに、仏教は初期の段階から言語間の相違に向き合うことになった。宿命とも呼びうるそのような言語的差異に挑み、仏教はそれを克服した。仏弟子のなかでも顕著な特質をもつ十大弟子のひとり、プールナは、説法に卓越した人物であったので、のちに説法第一と称された。彼は北インド一帯の様々な民俗語にも精通していたといわれ、古代マガダ語で説かれた釈迦の教えは、伝道の過程でプールナをはじめとする弟子たちによって当時のインドの諸言語へと移し替えられていった。そのような自由な変換は、釈迦の教えそのものに基づいていると考えられる。「ことば」の権威主義的側面を強調するバラモン教を正面から否定し、自身の悟りと法を重要視する釈迦は晩年、弟子のアーナンダに次のように語ったとされる。

「アーナンダよ。わたしはもう老い朽ち、齢をかさね老衰し、人生の旅路を通り過ぎ、老齢に達して、わが齢は八十となった。(中略)この世で自らを島(原語はdīpaで、「燈明」と解する訳もある)とし、自らをよりどころとして、他のものをよりどころとせず、法を島とし、法をよりどころとして、他のものをよりどころとせずにあれ。」(中村、1988:443)

このように、釈迦は自身による悟りと実践の重要性を説き、自分と法以外への依存を否定した。この姿勢は、弟子たちがそれぞれの言葉で積極的に法を説く原動力になっていったのではなかろうか。解釈の幅という「ことば」の余地を、仏教はその起源から備えていたということになる。仏教史においては、そのような解釈の幅が、後々のサンガの分裂という結果を招くことにもつながっていく。仏教は初期の段階からすでに多角化、多様化する性格を併せ持っていたといえよう。

[引用文献]

中村元『ゴータマ・ブッダ 釈尊の生涯』中村元選集第11巻、1988年第10刷。

玄奘(水谷真成訳)『大唐西域記』第二巻、東洋文庫、1999年。